プロローグ

I

僕が生まれた火曜日は特別な日だ。

僕が生まれた火曜日は特別な日だ。それも、僕や、僕の両親や兄だけの、またはアイムスビュッテルやハンブルクだけの特別な日ではない。その日は、すべての人にとっての特別な日だ。その理由は明白なのだが、あまり知られていない。その日は、一九六三年の第一八三日目なのだ。一年の一八三日目には正月や大晦日と同じくらいの意味がある。この事実を知っている人があまりに少ないことに、僕は驚いてしまう。第一八三日目は、一年のちょうど真ん中の日だ。

どうして一年の最初の日と最後の日には名前があるのだろう？ そして、どうして一年の真ん中の日には名前がないのだろう？ 世の中には簡単な問いと難しい問いとがある。すぐに答えられる問いもあれば、少し時間のかかる問いもある。

僕の家族にとっては、この七月二日にはさらにもう一つの意味がある。この日の三十九日前は兄の誕生日で、三十九日後が母の誕生日なのだ。僕はこのめったにない偶然を、とても幸福に思っている。

II

自閉症者の中には静かに、自省的に日々を送る人たちがいる。

自閉症者の中には静かに、自省的に日々を送る人たちがいる。世界が頭の中をぐるぐる駆け巡っているので、元気に動き回る人たちもいる。人に本当に感謝するということが一生できない自閉症者は多い。けれど感謝の決まり文句を正しいタイミングで口に出すので、まるで自分がなにを言っているのか理解しているかのような印象を周りに与える自閉症者たちもいる。よく笑い、よくしゃべる人たちがいる。どちらかといえば無味乾燥で無口な人たちもいる。憂鬱にとらわれて絶望し、ふさぎ込む人たちもいるし、人生の陽気な側面だけを見て生きている人たちもいる。

自閉症の中で生きることは、自閉症のない世界で生きるための惨めな準備期間だ。礼儀正しい人間でいるためには、そこに足を突っ込めば礼儀知らずということになってしまうたくさんの「ネプヒェン」を避けて通らなければならない。（訳注 ネプヒェンは「小鉢」の意。つい言ってはならないことを言ったり、無神経な言動を取ってしまうことをドイツ語で「小鉢を踏む」という。）自閉症者は、そのネプヒェンのすべてを踏むことにかけては達人だ。

III

そもそもなにも知覚することができないのに、どうやって人間を知覚すればよいのだろう？

そもそもなにも知覚することができないのに、どうやって人間を知覚すればよいのだろう？ コウモリではないのに、どうしてコウモリとしてこの世界を飛び回ることができるだろう？ いわゆる完全な人間たちに、僕の人生のこういった輪郭の話をすると、彼らは決まって驚いた顔をして、すぐに、僕はまったく自閉症者には見えないと言う。そういうとき僕は、おっしゃるとおりです、と答える。たいへん幸運なことに僕の症状は軽いほうなんです。

二十一歳の頃から僕は一人暮らしをしているし、自分の生活費を自分で稼いでいる。多くの自閉症者とは違って随伴障害に悩まされずにすんでいるので、目立たずに日常生活を送ることができる。この「目立たないでいる」ということのために、僕はとても苦労してきた。ほんの数年前まで、いわゆる完全な人間たちの感情の表現方法すべてが、僕には欠けていたのだ。幸運なことにいまは違う。僕の声は生き生きしているし、僕の顔は感情をはっきりと表現することができる。僕の手はもう感情表現の身振りを拒否したりしないし、コウモリたちの目をのぞき込むことだってできる。

残ったのは一種のユーモア感覚で、僕は思わず笑ってしまうのに、自閉症者でない人たちにはなにがおもしろいのかさっぱりわからないということがよくある。もしも前のページの「ネプヒェン」という言葉に注意を向けた読者がいたとしても、こんなに愛らしい言葉を僕の本の冒頭に迎えることができて僕がどんなに幸せかをわかってもらえることはまずないだろう。

IV

人生の最初の二年間、僕の家はハンブルク市内のアイムスビュッテルという地域にあった。

人生の最初の二年間、僕の家はハンブルク市内のアイムスビュッテルという地域にあった。僕の両親はエドゥアルド通りに住んでいた。五十年代半ばにはもう、僕の父は生活費を稼ぐ仕事のために、生物学を専攻していた大学を中退していた。その非常に珍しい生活費稼ぎの仕事が、採算の取れる仕事にまで成長したとき、僕の母は父のところに引越してきて、二人は子どもが欲しいという願いをかなえた。一九六二年に僕の兄が生まれた。母は秘書の仕事を辞め、一年後に僕が誕生した。

六十年代の半ば、富が僕の両親を訪れた。このお客がどれくらいとどまってくれるのか、彼らにはわからなかった。もちろん、お客がすぐに旅立ったりしないことを彼らは祈っていた。朝から晩まで勤勉に如才なく働いて、彼らはこのお客がずっと彼らのもとで快適に過ごせるように努めた。

新しい契約が入った。一九六五年の晩夏、彼らは思い切ってアイムスビュッテルからエルベ川流域の町グロース・フロットベクへと引越すことにした。賃貸住宅から、持ち家へ。

中庭に面して一棟に四戸、その棟が十列、フォアベック道の東側に整然と美しく並び、団地を形成していた。十一番目の列はなく、その空き地で二ダースほどもいる子供たちが喜んで遊んでいた。団地の真ん中には快適な遊び場もあった。

僕が二歳で、すでにホーフハウスに住んでいたころ、僕の周りの人間はその外見を失った。彼らの目は空気の中に消えてしまった。彼らの顔を霧が覆い隠した。彼らの声は蒸発してしまった。時間とともに僕の周りの人間たちはパタパタと飛び回る影に変身し、僕の上に降りかかってきた。まるで宇宙から僕の世界に舞い落ちる雪みたいに。

彼らを知覚することが、僕にはとても難しかった。世界はまだ僕の目に見えていたけれど、その中にいる彼らはほとんど目に見えない存在だった。やがてこのパタパタ飛び回る生き物たちは、鮮やかな影たちと融合した。僕はこの二つを区別することを覚えた。一方がいい生き物たちで、これは鮮やかな影。もう一方は僕に脅威を与える生き物たちで、これはコウモリ。鮮やかな影がなんの前触れもなく突然コウモリに変身することもあるし、その逆もあ

る。それがどうしてなのかはわからなかった。

水溜まりみたいな彼らの顔は、雨降りのあとみたいに湯気を立て、彼らの口からは雑音が漏れた。この雑音から僕は、響きも意味も聞き取ることができなかった。僕の中に静寂が訪れた。僕の世界を他人と分かちあいたいという衝動が失われた。僕の唇は疲れて動かなくなった。僕がなにかを言うと、舌からは病んだ言葉が引きずり出されてきた。僕が話す文章はだんだん簡素に、短くなっていった。各音節は乾ききり、埃のようになった。やがて僕は、どもりながらしか話せなくなった。

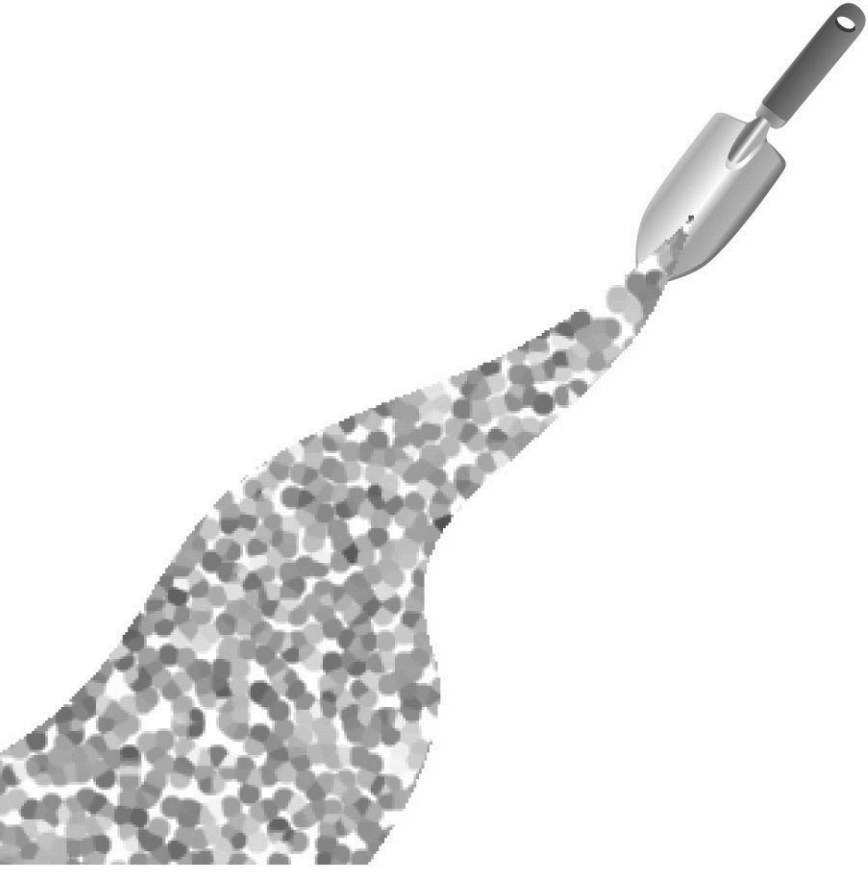
僕の言語能力は「貧しく」なった。この損失ははっきりと目に見える形で現れた。数週間前には口が疲れるまで言葉を使って表現していたことを、僕は手や腕を使って指し示すようになったのだ。言葉のこの「貧困化」は他のことにも及んだ。

僕は他人を必要としなくなった。

一年たってはじめて、鮮やかな影たちが言葉と呼ぶあの雑音から、僕は再び響きと意味とを聞き取るようになった。

幼年期

1965 ～ 1969 年



1965年

二歳二か月〜三歳四か月

ホーフハウスのバルコニーに、ハハが木を植えていた。前の家のバルコニーでは迷子になることなんてなかった。でも新しいバルコニーはものすごく広かった。前のバルコニーでは、手すりの向こうを見ることもできた。椅子によじ登ればよかったのだ。新しいバルコニーの手すりからは、たとえ椅子から跳び上がったって絶対に向こうを見ることなんてできないだろう。新しいバルコニーをハハがバルコニーと呼ばないので僕は混乱していた。ハハはバルコニーのことを庭と言い、手すりのことを壁と言った。

バケツとスコップを使って、黒い土で遊ぶのはいやだった。黒い土はべたべたしすぎていた。僕は四角い場所に行きたかった。雲みたいに白い手すりの向こうでは、雲で真っ白な空が遊び場の上に広がっていた。そこには、ハハが砂場と呼ぶ四角い場所がある。そこの砂はキョウダイの髪みたいに黄色くて、砂糖みたいにさらさらだった。

僕はスコップでバケツのふちを叩いて、僕のやりたいことに気づいてもらおうとした。背の高いハハは、ちょうど木の根の上にかぶせた土を踏み固めているところだった。彼女は僕に目を向けると、なにか言った。その言葉は雑音ではなくて、ちゃんと響きも意味もあった。彼女がなにを言っているのか、僕にはわかった。僕はまだ小さいので、一人で遊び場に行ってはいけない。いまいる場所から…つまりバルコニーから離れてはいけない。

★★★

カチャカチャカチャ。僕が赤いバケツを持って行ったり来たりすると、白と青のスコップがふちに当たって音を立てた。カチャカチャカチャ。ハハが家のドアを開ける。キョウダイがハハの横をすり抜けて外に飛び出す。行ったり来たり、カチャカチャ音を立てて、僕は二人の鮮やかな影に続いた。砂場が僕を待っている。

団地の棟の列の前の敷石が僕にあいさつした。これほど奇麗に整然と並んだものを僕は他に知らない。石と石の隙間は踏んではいけないので、気をつける。カチャカチャカチャ。団地の列は長くて、雲のように真っ白だ。細かいちりの舞う四角い石は、僕を安心させてくれる。カチャカチャカチャ。手に握ったバケツの取っ手は軽い。列の先のほうで、ハハとキョウダイが左に曲がった。カチャカチャ。砂場までもう少しだ。

あーあ！ 僕は遊び場の入口に立ち止まった。今日もまた運が悪い。キョウダイが駆け出した。カチャカチャはなしだ。砂場は子どもコウモリたちでいっぱいだった。ハハが僕を引っぱっていった。僕はがっかりして砂場の木のふちに腰を下ろした。

カチャカチャはなし。

でもしばらくすると、僕はやっぱり砂に膝をついて、砂場の隅のほうへ進出した。そこはまだあまりごった返していない。僕は子どもコウモリたちに背を向けると、スコップで砂をすくってバケ

ツに集め、それから手で砂山を平らになるまでゴシゴシした。
トントン。
僕の手はバケツのふちに当たっては砂の上をはね返り、当たってははね返った。ハハがキョウダイと一緒に転げ回っている子どもコウモリたちの一人ひとりを指さして、口から雑音を出した。
「ペーター…ヴォルフガング…バーバラ…ゲルト…クリストフ…」
僕はその音をもう聞いていなかった。子どもコウモリたちには名前があって、その名前は黒い土みたいに退屈だ。ハハは僕に子どもコウモリたちと遊んでほしいと思っていた。僕は子どもコウモリたちとは遊びたくなかった。バケツに入った砂と遊んでいるほうがずっと楽しかった。
トントン。

★★★

廊下で、砂みたいな黄色の暖房が僕を出迎えた。暖房のうしろには階段があって、地下室へと続いている。僕は暖房を叩いた。カチャカチャ。階段のふちから下をのぞいてみた。地下室に僕だけの砂場があったらいいな。
僕は左手で手すりにつかまって、注意深く階段を下りた。やし皮でできた砂色のじゅうたんが床を覆っている。僕は膝をついた。編み込まれた堅い繊維が僕の注意をくぎづけにした。ろうを塗ったひもが少しねっとりしているのが気に入った。僕はじゅうたんの編目模様をなぞりはじめた。どんな小さなゆがみもすぐに平らに伸ばし、あちこちにあるけばだちも見逃さなかった。僕は模様ができてくるまでじゅうたんをゴシゴシした。これは報われなくてもやっているだけで楽しい仕事だ。
ゴシゴシ終わり。
ずんぐり脚の洋服ダンスがずらされている！じゅうたんで鍛練した僕の目が、この変化を見逃すはずがなかった。洋服ダンスの脚があった場所に、

くぼみになった跡が発見された。いったいどうしてこんなくぼみができたんだろう？ このくぼみは洋服ダンスの脚の跡だということは、僕にもわかった。僕はじゅうたんを引っぱってみた。ぜんぜん動かない。洋服ダンスを押してみた。ぜんぜん動かない。もう一度じゅうたんを引っぱってみた。タンスはやっぱり動かない。

ここではない他の場所にあるなにかを暗示しているこのくぼみのせいで、僕の気分は落ち着かなかった。物にはそれぞれふさわしい場所がある。物はその場所を勝手に変えてはいけない。これは僕の規則だった。アナグマとハハはこの規則が好きではなかった。でも、なんの前触れもなくいきなり家具の位置を変えたりしたら僕がどんなに驚くか、二人とも知っているはずだ。そういうとき僕は叫びながら部屋を飛び出し、安全な場所へと避難する。普通両親と呼ばれる鮮やかな影たちは、家具を動かすのが好きだ。ハハとアナグマもこの好みに関しては例外ではなかった。

くぼみは洋服ダンスの脚の下になくてはいけない。僕はもう一度じゅうたんを引っぱった。無駄だった。なんだろう？ 僕は手でじゅうたんの下をなでてみた。ゴシゴシで疲れた手の肌に、砂の感触があった。地下室にある僕だけの砂場？ 僕はやし皮のじゅうたんを少し丸めてみた。床の上には灰色の砂が積もっていて、僕はそれをうっとりして見つめた。砂はパウダーシュガーみたいに細かくて、雷のときの雲みたいな灰色だった。

僕だけの砂場。僕は砂で遊びはじめた。一瞬一瞬が溶け合い、時間は音をなくした。

砂いじりの楽しい時間が少し過ぎたあと…

え？ 雑音？

ハハが叫び、雑音を出し、また叫ぶ。僕にはなにもわからなかった。ハハは僕を引っぱり起こしてゆすぶった。それからだんだん落ち着いてきて、ひとさし指で僕の砂場を示すと雑音を出した。

「だめ…だめ……だめ…砂場じゃない…だめ…だめ…だめ…」

ハハとアナグマとキョウダイは外出するので、僕も一緒に行かなくてはいけないらしい。僕は行きたくなかった。地下室でパウダーシュガーの砂と遊んでいるほうがずっといい。

僕は子供部屋で服を着せられた。僕の両手はまだ水で濡れていて、ばらの花壇の匂いがした。毛糸のタイツが僕は好きではなかった。キョウダイみたいにズボンを履きたかった。タイツはひどい服だ。僕はさからったけれど、ハハはあきらめなかった。僕はタイツを履かされてしまった。それから靴、コート、帽子が続いた。

車の中で、僕は何度もタイツをつまんで引っぱった。ズボンなしで外に出るのはいやな気分だ。僕はずっとめそめそしていた。今日はひどい日だ。タイツはひどいし、僕にちゃんとしたズボンをくれないなんて、これもひどい。地下室の僕の砂場に戻りたかった。

アナグマとハハは新しい建物のある一角まで歩いていった。部屋の中は石を砕いた細かい粉、木材用ワニス、壁紙に塗るペンキの匂いがした。けれど匂いはどうでもよかった。僕の頭はタイツのことでいっぱいだった。僕は休みなくタイツを引っぱっていた。車に戻る途中、歩道の敷石が目にとまった。四角い模様は、団地の列の敷石と同じだった。灰色の歩道の敷石と黒くて湿った土とが交代で並んでいるのが、僕の注意を引いた。新しい建物の前には、手すりのない巨大なバルコニーがあって、そこではまだ木もやぶも育っていなかった。乾いた灰色と湿った黒が並んでいる様子をよく調べてみなくてはならない。もしかしてここには砂場があるんだろうか？

僕は道のはしに寄って、敷石のちょうどはしっこを大いばりで歩いた。バランスを取る練習をしていて — 突然ぐらりときた。僕は転んだ。左の膝

は泥の中に突っ込み、両手はすごい音を立てて敷石に打ちつけた。転んでも痛くはなかった。ぎくしゃくと、僕は起き上がった。そして自分の姿を見下ろしてショックを受けた。泥が膝にこびりついている。どうして転んでしまったのか、僕にはすぐにわかった。タイツのせいだ。

まるでなにもなかったかのように、アナグマとハハは歩いている。キョウダイが二人のあとに続いていた。車の中で、僕は嘆き哀しんだ。何度も何度も膝を見下ろした。泥は僕の一部になってしまった。みじめな気分だった。僕の左の膝は泥だ。冷たくて、べとべとしている。暖かくてさらさらした黄色い砂が僕は好きなのだ。冷たいべとべとの泥は好きじゃない。僕は気持ちを落ち着けることができなかった。ハハが振り向き、唇がパクパクと動いた。ときどき唇の動きから雑音が聞き取れることもあった。

幸運なことに家へはすぐに帰りついた。慣れ親しんだ団地の敷石が僕の苦しみを少し和らげてくれた。家の廊下にたどりついたときには、僕のめそめそはだいぶ勢いが弱くなっていた。暖房が僕を慰めてくれた。鮮やかな影の一人が僕を廊下の椅子に座らせた。今日はひどい日だ。ちゃんとしたズボンを履いていれば、こんなことにはならなかったのに。ハハが僕のタイツのゴムをつかむと、勢いよく脱がせた。なにも感じないうちに、泥は僕の膝から消えた。どうしてこんなことができるんだろう？ 僕はますますタイツに対する驚きを強めた。ハハは裏返しにしたタイツを僕の顔の前に突きつけた。それから雑音が聞こえたが、ここからは響きと意味とが聞き取れた。

「見てごらんなさい」

泥はタイツから消え去っていた。泥はどこだ？ 僕は自分の膝を見下ろしてみた。真っ白だ。廊下の暖房の上に掛けられたタイツを見てみた。もう泥はついていない。僕の目の前ではハハの赤い髪

が輝いていた。彼女はまた、僕には速すぎる勢いでなにか話した。ハハの唇の動きからは、翼がパタパタ動くような音しか聞き取れなかった。

ぐったりして僕はベッドに沈み込んだ。掛け布団の上をゴシゴシすることさえしたくなかった。それくらい疲れていた。ちゃんとした僕だけの砂場があれば、めれんげみたいに素敵なのに。

★★★

ハハが部屋へやってきた。彼女は木でできたおもちゃの鉄道を取り出すと、僕に手渡した。キョウダイは出かけているから、僕は一人で遊ぶことになっていた。ハハが雑音を出した。

「あとで…おばあちゃん…バームベク…」

めれんげ、めれんげ、と僕は口ずさんだ。木の鉄道の山から僕はレールを次々に取り出して、床の上に並べた。大きさと形にしたがって、きちんと一列に。

めれんげ（べぜー）— めれんげ — めれんげ。

同じように車両も並べた。ただ、二つのトンネルのところで手が止まってしまった。これは一つの管を半分にしたものなんだろうか？ 僕は二つのトンネルをくっつけてみようとしたけれど、うまくいかなかった。

バームベク — バームベク — バームベク。

がっかりして、僕の息は荒くなりはじめた。けれどそのうち、殻で覆われたトンネルの屋根に注目した。僕の指は、丸い屋根の上のどんな小さなでこぼこも逃さずに調べ上げた。こぶやゆがみに鼻を近づけて、僕はクンクンと匂いをかいだ。

めれんげ — めれんげ — めれんげ。

ハハはキョウダイを迎えに出ていった。カチャカチャカチャの時間だ。一人でいるときにだけ、僕はこの遊びをした。僕は指で木のレールをつかみ、丸い継ぎ手でトンネルの上を叩いた。カチャカチャカチャ。僕は自分の動きに夢中になった。一瞬一瞬が溶け合い、時間は音をなくした。

突然キョウダイが駆け込んできて、僕の横に座ると、遊びはじめた。彼は素早くレールを丸くつなぎあわせて、まっすぐな部分にトンネルをかぶせた。それから木の機関車に手を伸ばすと、それを二つの車両とつないで、できた列車をレールの上に置き、シュッシュッと走らせはじめた。僕は驚いてキョウダイの動きを見つめ、彼の唇がシュッシュッと音を立てるのを聞いた。もしかして僕の兄は月からやってきたんだろうか?

昼ご飯のあと、僕はまた服を着せられた。

めれんげ — めれんげ — めれんげ。

団地の敷石は整然と並んで僕を迎えてくれた。これ以上きれいなものを僕は知らない。石と石の隙間は踏んではいけないので、気をつける。

先のほうで、ハハとキョウダイは、砂場が僕を待っているはずの左には曲がらなかった。アナグマがプラムみたいな青色の車を運転してきた。僕は手の匂いをかいでみた。ばらの花壇の匂いがした。

青に変わる信号の一つ一つを通りすぎるたびに、めれんげ街に近づいていく。アナグマは用心深く交差点をカーブしていった。窓のほこりの跡さえ、僕の目には入らなかった。キラキラを見たりジロジロしたりするために必要な落ち着きを僕は失っていた。たまに毛糸のジャケットの上をゴシゴシしたけれど、夢中になってやったわけではなくて、興奮を抑えるためだった。れんが造りの家が見えてきたので、めれんげ街にやってきたことがわかった。ハハが雑音を出した。

「…オットー・シュペックター通り…」

バームベクに建ち並ぶアパートがはっきりと目に見えるので、僕はうれしかった。れんがでできた壁が僕の目をくぎづけにした。雲のように真っ白で形のない団地とはまったく違っていて、気持ちがいい。このあたりの家々を僕ははっきりと見ることができるけれど、フォアベック道の家々は

そうではなかった。
僕は建物のドアへと駆け寄った。キョウダイには電灯のスイッチはどうでもいいみたいだったけれど、僕にとってはすべてだった。僕は建物の真っ暗な廊下に身を躍らせた。古めかしいスイッチを押すと、鈍い光が広がった。電球の光の中、足を踏みしめながら、僕はギシギシいう階段を四階まで上った。
アパートのドアはいつものようにもう開いていて、柔らかなランプの光に照らされて、アナグマのお母さんの弱々しい姿が僕たちを待っていた。僕は彼女をおばあちゃんと呼んでいた。
めれんげ — めれんげ — めれんげ。
貯蔵用の瓶が廊下と台所の棚に所狭しと並んでいる。天井のランプが大量に貯えられたこの宝物たちの上に光と影を落としていた。瓶の冷たい表面を指でなでて、ドーナツ形のビスケットやざらめ糖に注意を向けるのが僕は大好きだった。居間に入ると、僕は僕の指定席まで這っていった。そして木の椅子の上についているまるでアルファベットみたいな傷を爪でひっかいた。幸いアナグマのお母さんはワニスの上についたこのみみず腫れにまだ気づいていなかった。偶然できてしまった小さな模様の上に、僕は「使い古した」という感じの模様をつけた。
しばらくして、鮮やかな影たちの大好きなおしゃべりを、アナグマのお母さんがさえぎった。彼女は立ち上がり、食器戸棚を開けた。この瞬間、僕の周りのすべてが消え去った。誘うような鮮やかな模様の缶が現れた。
缶のふたが、両手の中で溜息をついた。僕はものすごく集中していたので、どんな言葉も僕の世界に届いた。
「メレンゲが欲しい?」とアナグマのお母さんがきいた。
興奮のあまり僕は返事をすることができず、た

だうなずいただけだった。鮮やかな影たちの言葉ではこれは「はい」という意味だ。欲望で心臓をどきどきさせながら机に座った僕は、めれんげの上半分を持ち上げると、一心不乱に皿の上に置いた。

「くずをこぼしちゃだめよ」とハハが言った。

ここオットー・シュペックター通りほど、ハハの声がはっきりと聞こえる場所はなかった。空気のように軽いめれんげは僕の唇の前で揺れて、僕に食べられるのを待っている。僕の歯はケーキのふちにさわり、喜んでキャッキャと声を上げるお菓子のひとかけらを囓り取ると、このおいしい獲物を舌にのせた。いまや舌の役割は、このひとかけらを慎重に口の中で押しつぶし、それからこの堅いつぶつぶがつばで溶かされるようにすることだ。僕はうっとりとケーキを歯から舌へと運び、甘い溶液を片方のあごからもう片方へと移した。どろどろのめれんげに埋もれた舌の先にまだ醜い塊のままのケーキを感じ取ったけれど、それもすぐに粉々になって僕の口の中を刺激した。最後の塊がどろどろになるまでは、中の物を飲み込んで僕の口をこの甘い仕事から解放するわけにはいかない。次の一口に注意を集中する前に、まず全部を味わってしまわなくてはいけない。

★★★

僕だけの砂場はなし。やし皮のじゅうたんとパウダーシュガーの砂は引越しをしてしまった。僕は全部に同じ名前がついている小さな四角の上にしゃがみこんでいた。ハハとアナグマはこの四角を全部タイルと呼んでいる。いまは冬で、冬は外で砂糖みたいな砂と遊ぶには寒すぎるのだ。

僕の静寂の世界を破る騒がしさは頭の上のほうからやってきた。ハハが廊下の暖房の横に立って、雑音を出していた。

「…行くのよ…ベーゼラー広場…」

一つの言葉が響きと意味を持った。「めれんげ広

場」。僕は立ち上がって、地下室の階段を上った。
めれんげ — めれんげ — めれんげ。
服を着せてもらうあいだ、僕はわくわくしていた。両手の匂いをかいで、口から言葉を出した。
「バームベク — バームベク — バームベク」
ハハが雑音を出した。
「ちがうの…おばあさんじゃなくて…オートマーシェン…」
団地の敷石は整然と並んで僕を迎えてくれた。この並び方は地下室と同じだ。石と石の隙間は踏んではいけないので、気をつける。
「タイル — タイル — タイル」
ハハが雑音を出す。
「ちがう…敷石…」
団地の列の終わりで、ハハは左に曲がって遊び場には行かず、プラムみたいな青色の車に乗った。僕は両手の匂いをかいでみた。毛糸の手袋の匂いだ。
めれんげ — めれんげ — めれんげ。
信号と交差点をいくつか通りすぎると、オートマーシェンのめれんげ広場に着いた。まるでバームベクにあるみたいな名前の広場だ。香ばしい雲の白と、柔らかく溶ける舌ざわりが僕の口の中を満たした。
ドライブが短くすんだことがうれしくて、僕はパーキングメーターの周りを跳びはねた。メーターに自分でコインを入れさせてもらって、つまみをガチャッと下に引っぱった。駐車場からめれんげさんの住んでいる家まではすぐだ。僕はハハの隣をちょこちょこと歩いた。めれんげハウスは駐車場からすぐで、新しかった。入口はすごく感じがいい。その日は晴れた冬の日だったけれど、あの口の中でちくちくするおいしい塊のことを考えると、まるで晴れた春の日みたいに感じた。
ハハが廊下にある一つのドアの呼び鈴を鳴らした。カチャカチャという呼び鈴の音は大きすぎもしないし、小さすぎもしない。僕はカチャカチャ

という呼び鈴が好きだった。リリリリという呼び鈴とはぜんぜん違う音がする。でもどちらも、希望に満ちた音がする。もうすぐごほうびがもらえるよ、という音だ。

少し歳を取ったコウモリの女の人がドアを開け、あいさつの雑音を出した。僕はコウモリたちの前ではいつもそうするように、黙っていた。ハハの隣をよたよたと歩き、僕は部屋の真ん中に置かれた椅子に座らされた。見知らぬコウモリが僕の向かい側に腰を下ろして、ハハと話をした。雑音は僕を素通りしていったけれど、いくつかの音節が飛んできて、響きを持った。

「…特殊学校（ゾンダーシュレ）…」

永遠にも思えるくらい長いあいだ、僕はめれんげを待っていた。じっと我慢強くしていたので、なにももらわないまま帰ることになったときには、余計にがっかりした。

めれんげのないめれんげハウスは、二度目に訪れたときには前より感じがよくなっていた。呼び鈴の音は一度目よりずっと僕の気に入った。ハハは僕に、めれんげのないめれんげさんは言語療法士だと教えてくれた。ハハの言葉には響きはあったけれど、意味はわからなかった。

めれんげのないめれんげさんが僕にあいさつをしたとき、僕はまたも黙っていた—用心のためだ。落ち着かない気分で僕は一度目と同じ椅子に腰を下ろした。めれんげのないめれんげさんが話しはじめた。彼女の言葉は僕のところに飛んできて、はっきりと、力強く僕にぶつかった。彼女が一文しゃべるたびに、この人は僕になにかを求めているんだということがだんだんはっきりしていった。雲みたいに白いケーキを食べられるという僕の希望は、食べかすも残らないほど粉々になって消えてしまった。

めれんげのないめれんげさんは、きれいな色のついたカードを何枚か取り出した。好奇心をそそ

られて、僕はそこに描かれた絵をのぞき込んだ。犬、猫、花、家に色がついている。めれんげのないめれんげさんがカードを指さした。彼女が僕になにを求めているのかが僕にはわかった。僕はそれぞれの絵にふさわしい雑音を探し出して、その雑音を口から出さなくてはいけないのだ。僕はこの使命を果たせなかった。僕の口からはどんな雑音も出てこなかった。この催しはどうも怪しい。僕は内側にこもり、黙り込んだ―用心のためだ。

その後めれんげのないめれんげさんは、コウモリみたいな話し方をやめた。彼女はどんどんおだやかに、親切になっていった。一つの言葉を全部言おうとしなくてもいいから、なにか一つの音だけでも口から出すようにと僕は言われた。けれど僕はまたしても失敗した。めれんげのないめれんげさんはそれでもあきらめなかった。しばらくすると、彼女はほとんど鮮やかな影たちと同じくらい親切になった。

普通ならこれは僕が完全に黙り込んでしまう状況だった。けれどここで、思わぬことが起こった。優しく、でもしっかりと、めれんげのないめれんげさんは僕のあごをつかむと、僕の目をのぞき込もうとしたのだ。僕の顔にさわった！あまりの緊張で僕は石のようになってしまった。めれんげさんの口から言葉が流れ出てきた。彼女はまたコウモリみたいになった。

僕のあごに添えられた指は僕の顔を固定しているわけではなくて、ただ一定の方向を向かせているだけだった。だからほんの少し動くだけで、僕の頭はまた自由になっただろう。けれど僕は顔をそむけることができなかった。めれんげのないめれんげさんは、僕から次々に声を誘い出していった。彼女が雑音を出す。僕はそれに雑音で答える。危険ではなかった。

僕は最後には、この時間を無事に乗り切ったことで幸せな気分になっていた。家へ帰ろうとして、

ハハの横を通りぬけて廊下へ出た。声が僕のあとを追ってきた。めれんげのないめれんげさんは、奇妙な雑音で一つのガラスの入れものを指すと、僕をそこへ連れていった。

「…ハーフェン…」

でもそれは、ハンブルクの港（ハーフェン）ではなかった。水もないし、波に揺れる船もない。彼女はそのガラス瓶（ハーフェン）を開けると、僕のことをほめて、小さいものを取り出し僕の目の前に掲げた。柔らかい緑の棒とその先にキラキラ輝く赤い実が結びついて、あるおいしい物の像を結んだ。言葉が僕の口からこぼれ落ちてきた。

「アメ」

この言葉には響きと意味とがあった。この言葉は僕の世界に届いた。僕はこの思いがけないごほうびを口の中に入れると、舌とあごで溶けていく赤い色を楽しんだ。